心

諒汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心

【Nコード】

N9125D

【作者名】

諒汰

【あらすじ】

スタイル抜群イケメン男女綾&柚唯。そして親友のかわいい系哩茄。そしてまた親友の絃杜。さて、この四人は一体何者でどんな運命を背負っているのか!?期待して待てっっっ!!!!!!

1 (前書き)

会話文が中心となってきましたので、
会話小説が苦手な方はご注意ください。

『 前略 彼方にお伝えしたい事があります。
 今日の放課後、中庭に来てください。
 1年 1組 簸 郁

「・・・持てる男はめんどくさいねえ。稜君や」
 「哩茄・・・。お前の親友もだぞ（一一）」

『 前略 貴女に 以下省略 』

「・・・」
 「めんどくさ・・・。」
 「どーする？ 柚唯行く・・・？」
 「んー。まあ一応いくけど、相手が何か言う前に断る」
 「もし、果たし状渡されたら？」
 「そりゃあもちろん受けるさ。」
 「だろうね（一一）」

（早い放課後in中庭）

「稜君！あの・・・その・・・わ・・・私彼方の事が好きです！」
 「それわどうも。しかし勝手ながら俺も好きな奴いるんで。」
 「・・・。それって、柚唯サンのことですか・・・？」
 「は・・・？」
 「みんな噂してます。稜君は柚唯サンの事が好きなんだって。」
 「がさつつつ」

「あたしがなに。」

「！！！！なんでここに！！！！」
「私もここで告白されてたから」
「っ！！・・・稜君」
「あ、はい。」
「変なこと口走ってすみませんでした」
「イヤ・・・あの、こちらこそスイマセン> m (——) m <」
「しつねいします。」

1 (後書き)

どうでしたかね・・・？短かったのであんまり意味が
分からなかったかもしれませんがね。

デハまた2でお会いしましょう。(^ O ^) /

諒汰

2 (前書き)

心の第2段です。 絃杜君初登場！

生活に必要なものは一通り揃っている2人用の部屋です。学校の寮のような部屋で、
実際学校の寮でした。この部屋の主の1人(女)がベッドの上にいました。
幸せそうに寝ています。

ピロリロリン ピロリロリン ピロリロリン ピロリロリン
ーン

イキナリ彼女の携帯がなりました。

「ん!?!?」 ガバツツ! 飛び起きました。

ピッ 「はいもしもし???」

「哩茄? 柚唯だけど。もう8時20分。」

「えええっ!?! ホントだっ」

「あほう。」 ブチツ 電話は切れました。

「ああもう、何で毎朝毎朝起きれないんだろう! 生まれ変わったら、夜明けと共に自然に

起きられる柚唯のようにになりたい!」なんて事をぶつくさ言いながら着替え始めました。

そして5分後、壮絶な勢いでドタドタと哩茄は走り出しました。

一方学校でわ。

「哩茄間に合うかな?」

「紘社は間に合うと思うのか?」

「いや、思わん。」

「つてか柚唯は何所行った?」

「校門付近哩茄迎えに行った」

『キーンコーンカーンコーン コーンキーンカーンコーン』

「ぬあああああああ~~~~!!!!.....もうだめだ.....」

『ピリリリリッッッ』

「はいはい.....」

「もしもし？柚唯だけど。残念間に合わなかったね。」

「クッ！嫌味やろうめ！」

「ああ！？んだとテメエ！」

「いえ.....なんも。」

「ならいいけど。覚悟しとけ。」

「な.....何を.....」

「校門前、生徒会が取締りしてるから。」

「ええええええ？」 ブツチ..... またまた一方的に切ら

れましたよ。この人

.....
そして校門前.....

.....

「うつわほんとだ。最悪¥（。□¥）（/□。）/」

「はい！そのあなた。生徒手帳を出して！」

「.....」

あきらめた哩茄が、鞆の脇ポケットから渋々生徒手帳を出しました。

「今まで何回遅刻した？」

「そんなことどうでもいいじゃないですか。」

「!!!!!! 柚唯さん!!!!!!」

「どうも先輩方。あんまりしつこく訊いてると、Stの時間になっ
てしまいます。」

「そうですね.....。でわ哩茄さん。明日からは気をつけて

「ください。」

「行こう。哩茄。」

「あ。うん。」

二人が行った後……。

「会長！！！何であの二人を行かせるんですか！！！」

「あの二人……いや、あの4人は使命を持っているから……
いつか生き別れるかもしれないから。」

「え、……？」

話は少し 遡る

2 (後書き)

絃杜君登場。そして哩茄ちゃんのおほさ加減と、柚唯ちゃんの微妙な優しさができました。

次回くらいから性格がみんなはつきり出てくることかと思えます。いやはやなんでしょうか。4人の使命とわ……。？まあ気にしないで下さい。あ、気にしてもらわないと、

ちよつと困るかも……。まあ、楽しみにしててください。つまらなかつたと思つた人、

すみません。私の力不足です。でも一瞬でも面白いと思つたのなら3もみてください。

また、何かご意見や良いネタなどがあつたら遠慮せずどんどん送ってください。

感想もマツテマス。

(. .)

メモメモ

諒汰

3 (前書き)

今回は過去のお話です。また、4人が15歳の頃の話に途中からなっています。その語り手は哩茄です。

ギクつつつ！！！！！！！！！！x2 綾&紘杜

「何でそのことを！！！！」 by 哩茄

「そりゃ女神だから。あと、バンパイアのパートナーの女二人も貧血に注意」

「それは絶対ない！！！！！！！！！！」x2

過去・・・ 稜・哩茄・柚唯・紘杜の出会いの話

昔私は、心臓が悪かった。そのため、一度も普通の小学校に言ったことがなく

友達など、いなかった。だけど冬のある日こんなことに気が付いてから私は変わった。

満月の夜でなくては気が付かなかっただろう。黒いコートをまとった二人の少年が

隣のビルの屋上から身を乗り出して歩き始める瞬間に……。

たしかこの辺に1人落ちたよねえ……。それとも目の錯覚？ってあ……。いた。

やっぱりさっきの飛行少年！！（の、片割） つつてもすぐ落ちこちたけどこの人は。

やっぱり超能力者？……。もしもし。」

「さわんじゃねーよ！ブス！！」 え？つと？

「あ……。生きて？」

「みりゃわかんたるバカかテメエ！」 くっ！口悪ー！！

「んで？どこよココ」

「寡劉総合病院の裏庭ですけど……。」

「どーりで血の匂いがするはずだ。ツーカーあんたとつとどっかいつてくれない？」

「は？そんなに文句あんならあんだの方がどっかいけば？こっちは心配してんのに！！」

「あのさあ。見てわかんない？俺今動けねえのヨ」

「それってい「いばることか？ポケット！！」 え・・・？

「あっ！さっきの飛行少年のもう1人！？」

「あ。見てたんだ。」

見てたってゆうか目に入っちゃたの方が正しい

「紘杜。食料持ってきたよ。っつーか誰？その子？」 うわー美少女が出てきたよ

「えっと。私哩茄っていいいます。」

「そう。私は柚唯ってゆうの。よろしくね。」

「俺は稜。よろしく。あと向こうでガッツイてんのは紘杜ってゆうんだ。」 そうなんだ。

ってかみんな綺麗だな。顔立ちいいし、背も高いし。で。

「あなた達って、一体何なんですか？」

クスツ^m^ 「バンパイアって、きーた事ない？」

「え・・・？」

「またね。哩茄チャン。」 タンツツ

人間て死期が近いと変な者まで見えるのかな・・・？

「15歳まで生きられるかどうか。」 私に医師が宣告した言葉だ。発作におびえながら病院内ですごす日々。それでも何とか15歳まで生きてきた。

次の日の夜

「哩茄チャン コンバンワ」

「柚唯ちゃん！」

「俺もいるぞ。紘杜はいないけど」

「稜君も！！！！」

「今日は特別にバンパイアの仕組みを教えてあげる。」

「普通バンパイアは15歳までに自分に合ったパートナーとなる人間を探すんだ。」

血を吸い、主人と同等の命を与える代わりに、主人となったものは常にその人間から

血を摂取できるとゆうしくみ。それから、パートナーがバンパイアどちらかでも死ぬと

もう一方も死んでしまう。まあ簡単に言えば一心同体みたいな感じ」

「バンパイアの寿命は約千年。紘杜も今年で15歳。ナノニまだパートナーを決めてないの。」

「ついでに言っとくとパートナーになったものは空を飛べるようになる。」

「バンパイアのパートナーは異性でなければならない。」

「え・・・?どうして?」

「バンパイアが同姓の血を吸うとその相手もバンパイアになってしまっから。」

「異性はとくに問題なし。」

「ついでに言っとくと、私は稜のパートナー。」

「!!!!そうなんだ!!!!私ずっとバンパイアだと思ってた。」

私はすぐに柚唯ちゃんと稜君とは仲良くなりましたが、何故か絃杜君には

冷たくあしらわれていました。そんなある日、

「柚唯！！！たすけてえ！！！」

「なに！？どうしたの！？」

「絃杜が倒れた！！お腹すい！！！！つつっ！！くるっ・・・しっ！！！」

「！！！！哩茄！！！」

「ゆ・・・い・・・大丈夫・・・っ！！！」

「どこが！！！！病室に戻るよ！！稜！絃杜のことよろしく！！！」

「了解！」

i n 病院

「ったく。哩茄ちゃん。もうこんなことがあつたら困るからね！」

「あはは ごめんなさーい！気をつけます」

「はぁ・・・。まあいいや、柚唯さん。ちよつといいですか？」

「え・・・？あ、はい？」

i n 医師の部屋

「もう、だめだ。体が持たない。」

「は・・・？何が？」

「哩茄ちゃんだよ。もう体が持たない。次の発作が来たらもうだめだろう。」

「なっ！！！！・・・それ・・・本当ですか・・・？」

「最後までいはやりたいことをやってもらいたいんだよ。彼女には・・・。」

「分かりました。すみませんが、明日外出する許可を下さい。哩茄が行きたがってた所へ行くんで」

「わかった。後で書類を書いてね。」

稜 柚唯 絃杜の会話・3人の家で

「・・・というわけで、明日哩茄がうちに来るから。」

「了解」

「ってかなんで家にくんだよ!」

「この家はお前の家であると同時に私と稜の家でもあるの。お解り?」

「へいへい(ー)(ー)」

次の日

「ただいま。哩茄連れて来たよ」

「お邪魔しまーす」

「ホントに邪魔だけどな」

「失礼な!!!」

「よし。街にでも行くか!絃杜、付いて来て。」

「何で俺が!稜は!?柚唯は!」

「俺は外に用事があるから行くけど?」

「私が付いて来てっていつてるんだから行くに決まってるだろうがボケ。」

街に到着

「街に出るの久しぶりだなあ」

「ったく。何で俺がためーの外出に付き合わなきゃなんねーんだよ」

「柚唯が決めたことだからかな・・・?」

「たしかにそうよね。私が決めたんだもんね」

「言い方がムカツク」

「さー哩茄ドコ行こっかー」

「そうだねー・・・」

「・・・俺は無視かよ・・・」

「よっしやお台場行こー!!」

「あ、私丸い展望台入りたいな!!」

「哩茄、お前どこのミーハーだよ」

「ねえそうでしょ！？だって体はそんなに反応してるじゃない！どうしてそんなつらい

思いまでして我慢しなきゃならないの！？」

「・・・だまれ・・・」

「絃杜！私の血をあげる！思いつきで言ってるんじゃない。私はあなたと・・・」

「だまれ！黙れ！だまれ！！お前に想像できるか！？千年だぞ！？」

「絃杜！いいかげんにしなさい！哩茄が困ってるでしょ！」

「うるさい！じゃあ柚唯は分かるのか！？お前だって一緒んだぞ！千年も生きなきゃ

いけないんだぞ！！この先千年も生き続けなきゃいけない恐怖がお前にはないのか！？」

「そりゃあるに決まってるでしょ！私だっけとこの世の先が見えないのは怖いけど

でも、私は稜と絃杜のことが大切だし失いたくなかったから私はパートナーになったの！

でも私の体は一つしかない！だから絃杜の性格に合うパートナーを私は探してたの！

そこに哩茄が現れた。ってか話が随分それたけど・・・ってかとつととお前がパートナーを 決めりゃあいいことだろうがっ！！！！

このあほー！！！！」

ドゴツ！ バキヤツ！ ゲギツ！

「・・・落ち着いた？」 柚唯・・・そんだけなぐりゃあ誰でも落ち着くだろう・・・」

「落ち着いた。・・・哩茄・・・」

「・・・なに・・・？」

4 (後書き)

さあ！一見雲行きが怪しくなっただと思っただら！すぐに快晴に！哩茄
ちゃんはやっど、

紘杜君のパートナーになれるのでしょうか！そしてこの話は何所へ
と繋がっていくの！？

今はまだ作者も知らん！(笑)乞うご期待！

「俺の…パートナーになつてくれ…。」
貴方にそう言われた時、私はどんな顔をしていたのだろう…。
柚唯が涙を流しながら喜んでいた事しか
おぼえていないから…。あ、でも夢かと思って確認するために
柚唯にほつぺたつねってもらったりもしたっけ…。

「哩茄!!意識ある?せつかく生徒会の人から巻いたのに、お礼もなし?」

「あははごめんごめん>m)——(m<昔の事思い出してた!」

「昔の事…。?」

「うん。柚唯達と出会ったばかりの頃のこと」

「ああ。あの頃ね…。」

「うん。」

「柚唯、哩茄。授業始まつてるぞ!早く来い!」

「うつさいぞ!稜。あ、野木ちゃん(担任)にうちらサボるって伝えといて」

「はあああ!?!?!ちよつまでえええつ!?!?!」

「逃げるぞ哩茄!?!」

「了解!」

「までえええええつ!?!?!とりやあ!?!」

「ちよ!?!今あの人窓から飛び降りたよ!?!」

「おい稜!あんま目立つ事してんじゃねえ!」

「うつせえ!こつちの身になってみる!」

「あはははははは!?!?!」

「むううう。稜め…。意外としつこかったぞつ…。」
「柚唯」。疲れたあーっ!」

「あたしもっ！でも屋上まではさすがに追いかけてこなかったねえ」

「いくら稜でもそこまでしたらストーカーだしね」

「あはははは！！！」x 2

『このときはまだ、こんな関係が、時間が、ずっと…ずっと…続くと思っていた』

それとほぼ同時刻。西校舎地下二階で一人の女子生徒が泣いていました。

「くやしい…。どうして、あたしじゃだめなの？どうして…
」？

今朝、稜に振られた女子生徒でした。そこに怪しい声が…

「ヤツガニクイカ？ニクイノダナ？」

「！？誰！？」

彼女は部屋の中を見回しましたが

誰もいません。彼女はちよつとヒステリーに答えました。

「だえ？私に話しかけているのは、誰なの！？」

「ソナナコトハドウデモイイ…。」

「よくないわよっ！泣き顔を他の人に見られるなんて…。」

「ドウデモイトイツテイルダロウ？アイツノコトガニクイカキイテイルンダカラ」

「いい加減むかつく奴ね！いいわ、答えてやるうじやない！憎いわよ！彼が憎い！」

「ダツタラソノネガイカナエマシヨウ！アナタガモウイチド、

ニクイトイツテクレレバケイヤクハセイリツデス。

サア、ドウシマス？イマナラ、オ・ト・ク」

「……。なにかの……さん？」
「ハイ？」
「ダ・カ・ラ何かの通販やさん？」
「チガウ!!!」
「だろうね。」
「ドチラニシロ、ケイヤクヲスルノカ？シナイノカ？」
「いいわ。してやるうじゃないのっ！」

話は戻り、屋上にて

「あ〜ねむい〜！柚唯、ねていい？」
「そうだね〜ねるか？」
「う……ん!？」
「……。」まさか……。
「柚唯……。この感じ……女神が言ってたのか……。」
「多分ね……悪魔……か。」
「あーあ。ついにここにも来ちゃった……か。」
「柚唯！哩茄！無事か!？」
「稜！早かつたねえ。紘杜は？」
「校内で出たみたいだから状況確認に行った。」
「そう。一般生徒たちは？」
「校内放送して寮の方に非難してもらってる」
「じゃあ結界張りに行かないと……。」
「分担するか。」
「ええ。私と稜で結界を張りに行きましょう。哩茄は紘杜の援護へ」
「了解」×2
「じゃあ、散!!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9125d/>

心

2010年10月28日07時24分発行